埼玉県の店蔵造の町屋に関する研究

AK13103　村松　実可子

Keywords
店蔵つき町屋　成立過程
市場町　与野　岩槻　東松山

1.　はじめに

1.1　研究目的・背景

明治から昭和初期に建てられた近代和風建築は、高度経済成長期以後の開発や現代住宅の普及に伴い、近年全国で急速に失われており、その実態調査と保護が喫緊の課題となっている。そのため、文化庁の指導、補助金を受け、平成4年度以降、順次、全国で調査が行われている。

現在、わが伊藤研究室では、昨年の平成27年度以降、埼玉県から近代和風建築調査を依頼され、さいたま市と比企郡に現存する近代和風建築の実測調査を行っている。本研究では、その中でも店蔵つき町屋に着目する。店蔵つき町屋の形態を明らかにし、その成立過程を探っていく。そのことで、文化財として保存されるべき建築を選定する基礎資料となることを目的とする。

1.2　研究方法

①調査対象地の与野・岩槻・東松山について歴史的文献、絵図を調べ、基本的な知見を得る。
②調査を依頼された店蔵つき町屋の実測調査を行う。
③蔵造り住宅の発展から衰退までの歴史を辿る。
④店蔵つき町屋の空間構成について類型化し、その成立過程を明らかにする。

2.　調査対象地について

2.1　与野の歴史

中世には、鎌倉街道の便通として本町通りが発展していく。また、江戸の近郊農村として農業生産力が高まり、交通の要所でもあったことから、市場が開かれた。

それが、近世になると、本町通りは甲州街道と奥州街道を結ぶ脇往還の宿場町になる。また、羽根倉河岸など荒川の舟運による近隣の物資集積地、市場の町としてさらに栄えていく。江戸時代末期から明治時代前期ごろ、度重なる大火により、蔵造りが導入され、特徴ある町並みがつくられていく。明治になって、高崎線・東北本線（明治18年）、また、昭和60年の埼京線の開通により都市化が進んでいく。

図1 与野町の市の風景

2.2　岩槻の歴史

岩槻は1457年の岩槻城築城以来、武蔵の国の要所として栄えてきた。江戸時代になると、日光東照宮が造営され日光社参が始まると、日光御成道が整備された。城下町としてまた宿場町として、岩槻は武蔵国東部の中心地として大いに栄えた。明治に入っても、南埼玉郡役所が置かれるなど、埼玉県東部の政治・経済の中心地であり続け、町作りも活発に行われている。また、岩槻はひな人形の産地でもあり、3月下旬にはひな市が開催され、根強い伝統をもつ地である。

2.3　東松山の歴史

1333年に築城されたとされる松山城の城下町として発展した街である。江戸時代には、川越道と日光脇往還道が整備され、松山宿は宿場町として賑わった。明治になって、養蚕が盛んになり、山製糸工場など工場や銀行などの企業が起こされていった。1833年にはJR高崎線が開通、1923年には東武東上本線開通、さらに市域に2つの駅が設置されるなど、交通網も徐々に整えられていく。後に、1954年には市制施行を行い、東松山市となり、駅周辺を中心に人口が増加。1975年には、関越自動車道川越IC-東松山IC間が開通し、交通・物流の拠点地点化が進む。

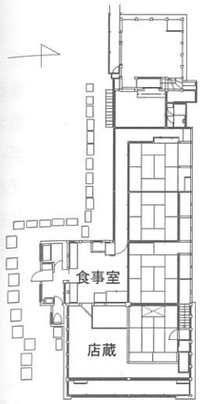
3.　調査対象建築物について

以下、埼玉県及びさいたま市による学術調査の結果を示すが学術研究にて名字を出す許可を得ている。

3.1　松本家住宅

対象地　さいたま市中央区本町西

工期は明治元年から明治3年で、土蔵二階建ての店蔵をもつ町屋である。当時は肥料販売商を営んでおり、現在は塩や砂糖などの専売を営んでいる。外観の黒塗り仕上げや小屋組の構造、内部の箱階段や電話ボックス等、技術的にも経済的にも秀でている。



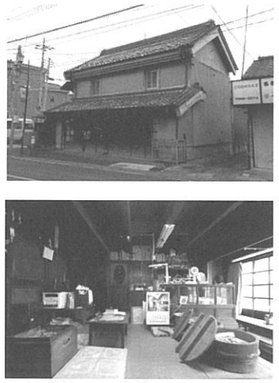


図2　松本家 一階平面図　　写真1　松本家 外観・内観

3.2　武川家住宅

対象地　さいたま市中央区本町西

明治24~25年で土蔵二階建ての店蔵造りをもつ町屋である。当時は織物仲買商を営んでおり、現在の店蔵部分は物置となっている。明治44年の家相図によると、ミセ部分は記載されておらず、当時は敷地の奥行きが現在の倍以上あったことが分かっている。

図3　武川家 一階平面図　　写真2　武川家 外観・中庭

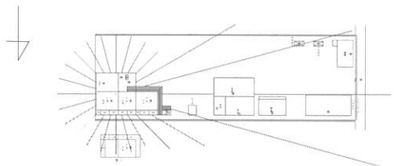


図4　武川家 家相図（明治44年）

3.3　中野家住宅

対象地　さいたま市岩槻区本町

工期は明治元年で、土蔵二階建ての店蔵をもつ町屋で、主屋は店蔵と一体となった土蔵である。旧岩槻城下の市宿町にあり、日光御成道に面する。当時は、酒造販売業を営み、現在は和菓子店として利用されている。文久元年（1861）家相図が残り、現在と同規模・同平面の見世蔵と主屋が描かれていて、敷地奥の土蔵や酒入置場など付属棟の位置の吉兆を占っている。この時期にすでに見世蔵と主屋の規模・形状が決まっていた状態だったと推察できる。

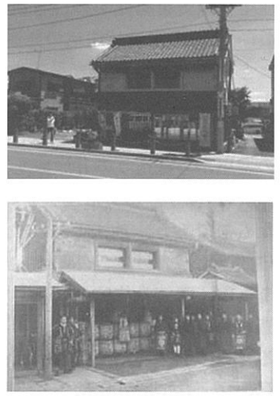


図5　中野家 一階平面図　　写真3　中野家外観・古写真

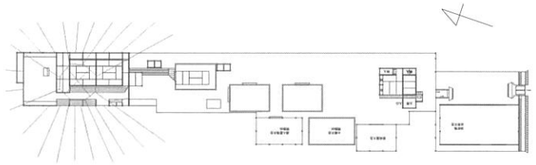


図6　中野家 家相図（文久元年）

3.4　江野家住宅

対象地　東松山市本町

竣工は大正2年で、土蔵二階建ての店蔵をもつ町屋で、主屋は店蔵と一体となった土蔵である。江野家は近世松山宿の名家である。店蔵は南に面して建ち、西には門と煉瓦蔵が接続している。店空間には摺上戸が残り、ファサードや土蔵造りの座敷、細部の意匠等、近代松山町を代表する町屋建築である。

図7　江野家 一階平面図　　写真4　江野家 外観・立面

4. 蔵造り住宅の歴史

与野・岩槻・東松山において最も蔵造り住宅が発展し、数多くの調査データが残っている町は与野である。今回の調査のほかに2000年の詳細調査を含め、与野の蔵造り住宅の歴史を紹介する。

4.1 与野の蔵造り住宅の発展と衰退

与野の蔵造り住宅で最古のものは、「与野町絵図」に描かれており、その位置や形状より井原庸次家と推定される。文政二年の大火以後、類焼した人々は、これまでの焼屋から蔵造りの井原家を見習いはじめる。

表1は、与野市史に残る実測データを基に、編年を示したものである。これによると、井原庸次家以降、二階開口部の面積の減少、外壁の塗厚の増大などがみられる。これは、蔵造り住宅が向上していく過程であり、特に調査対象建築物の松本家・武川家はその時期の頂点に当たる。その後、明治期に入り大火が少なくなり、再び防火意識が薄れていく。明治17年の井原きよ家や加藤文子家以降、真壁や塗屋造りが出現し、経済的負担が大きい蔵造りは衰退していく。

表1　与野の町屋の編年表（一部省略）

年代	名称	造り	二階開口部	壁厚（m）
文政	井原庸次家	土蔵	B	400
江戸末～明治初期	鈴木家	土蔵	A	310
	松本家	土蔵	A	264
	武川家	土蔵	B	300
明治17年以降	井原きよ家	土蔵	B	249
	加藤文子家	塗屋	B	110
	中村行雄家	塗屋	B	115

※A：換気口ほどの小窓、B：横長でAより高さがある窓

5. 店蔵造の町屋の空間構成の類型化

5.1 分類分け

4において、店蔵つき町家の発展から衰退までの歴史を明らかにし、調査対象建築物が貴重な店蔵造の町屋であることを理解した。次に、3で紹介した4軒と実測データが残る長谷川家（岩槻）、鈴木家（与野）のデータを含め、計6軒のデータを比較する。その結果、店蔵と主屋の関係性に違いを見出した。そこで、以下の３パターンに分類し考察を行うこととする。

①店蔵・主屋分離型
②店蔵・主屋構造一体型
③店蔵・主屋完全一体型

まず①は、店蔵と主屋がそれぞれ別々に分離している型をいう。次に②は、店蔵と主屋の構造は一体であるが、構法は異なっている型をいう。店蔵部分は土蔵で、主屋は、塗屋造りの町屋などが、この型に当てはまる。最後に③は、店蔵と主屋が全て一体となって作られた型である。主屋を含め全て土蔵で囲まれた、町屋がこの型に当てはまる。これら①～③にそれぞれ分類し、比較した表を表３に示す。

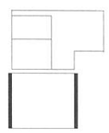
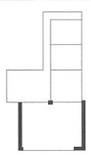
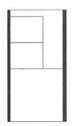
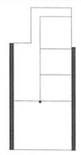
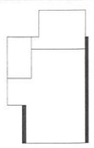
5.2 分析

①は、店蔵と主屋がそれぞれ分離しており、空間的独立性が強く現れている。特に、武川家においては、明治44年の家相図によるとまだ店蔵部分が描かれていないことから、後に店蔵が付け足されたことが判る。つまり主屋と店蔵がそれぞれ別々に建てられたということである。

②においては、①の店蔵と主屋が結合した構造であり、壁仕上げが異なった形式をしている。

それに比べて、③は主屋全体が土蔵で構成される。この構成は、②と比較すると全て一体の構造・構法であるため、最も耐火性能が高いが、工期もかなり有する。

表2　店蔵つき町屋の空間構成パターン

パターン	① 店蔵・主屋分離型		② 店蔵・主屋構造一体型	③ 店蔵・主屋一体型		
氏名	武川家	長谷川家	松本家	中野家	江野家	鈴木家
建築年代	明治24年 1891（1877）	明治10～20年 1877～1887	明治元年～3年 1868～1870	文久元年 1861	大正2年 1931	明治20年以前 ～1887
所在地	与野	岩槻	与野	岩槻	東松山	与野
平面構成図						

6. 店蔵つき町屋の成立過程

先行研究によると、関東から南東北地方に見られる、通り土間をもたない主屋の全面に棟を違えて店棟を接続させる形式を店棟造りと呼ぶ。その成立過程においては、市場の衰退を機に仮設であった内見世部分が次第に常設化し、店部分が成立していくと考えられている。すなわち、そもそも店部分は付加されたものであると推測されている。

図8　市立て時の町空間想定断面図

そのため、今回の研究においても、同じ市場町として発展してきたことを考慮すると、同様の形成過程を辿ってきたと推測できる。これを図式化すると、図9のようになる。まず、一列三室型（二室型）に土間が横についた形（⓪）を原型に、店蔵が付加し①になる。その後、①から別々のルートで②③に発展していくと推測できる。つまり、①が最も店蔵つき町家の初元形態を残すものであると考えられる。中でも武川家は、家相図によると店蔵部分は後から付け足されており、常設店舗の必要性によるものだと断定できる。そのため、武川家は主屋に店蔵を付加することで形づくられた過程を直接物語る貴重な例である。また、②③においては、独自で個々に発展してきた自由な構成だと考える。

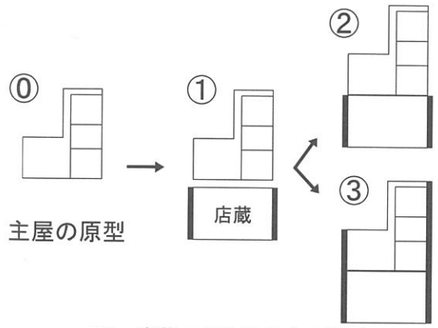


図9　店蔵つき町屋の成立過程

7. 主屋の原型

大門宿は、御成道沿いの宿場町で、岩槻宿の一つ手前の宿場である。図10の文政6年(1823)「大門宿家並屋敷絵図」には、本陣・脇本陣の他、15軒の家屋が描かれているが、農家型の平面、町屋型で後土間のもの、前土間のもの等多様な住居が並ぶ。その中でも、15軒中2軒が一列三室型（二室型）に横に土間が付加された平面構成をもつ。これは調査対象建築物の主屋の平面と同様であり、図9の⓪の原型と同じものである。また、この⓪の平面構成は、岩槻宿を構成する富士宿町の絵図（宝暦6年、1756年）にも、わずかながら見られる。

さらに図10をみると、街道と建物の間に帯状の空間が見られる。当時この空間では、市が開かれており、その内見世が次第に固定化し、店蔵つき町屋は成立したと考えられる。

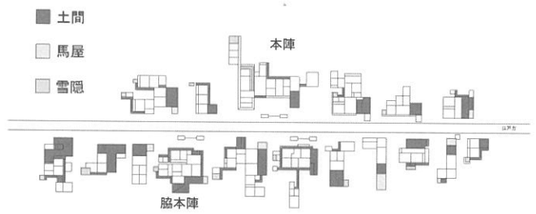


図10　文政6年「大門宿家並屋敷絵図」復元図

8. まとめ

本研究では、4においては店蔵つき町屋の導入から衰退までの歴史を知り、その形態を明らかにした。また、5・6においては、先行研究を基に店蔵づくりの町屋の成立過程を示した。さらに、7においては、大門宿の復元をもとに、主屋部分の原型を示し、さらに6で示した成立過程の裏付けを行った。

本研究によって、外観だけでは分からない町屋の背景を知った。そのことで、今回調査した建築物は、町屋の成立過程の流れを象徴する貴重な財産であると判断する。

今回の研究では、埼玉県の店蔵を取り上げ、その価値を示したが、まだ潜在的価値を見出せていない多くの歴史的建造物が残る。そのような建築物を後世に残していくためにも、建築史研究は大変意義あるものであると感じる。

参考文献

1) 『蔵造り住宅の系譜-蔵造り住宅の詳細調査-』
　与野市教育委員会　2000年
2) 『与野市史 文化財編』与野市総務部市史編さん室　1983年
3) 『岩槻市史 文化財編』 1985年
4) 『浦和市史 近世資料編』 1984年
5) 『町家の建築史論』　大場修　2004年
6) 「関東の定期市再考」　中島義一　2001年
7) 「宿場の街道と町家の間にみられる帯状の空間について」
　宗方保博　波多野純　2006年
8) 「伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究」
　宮本雅明　中川等
9) 「東日本における市町の構成と常設店舗の成立過程
　―近世町家の地方形式に関する史的研究―」大場修 石川祐一